

英語は国際社会を生き抜く手段



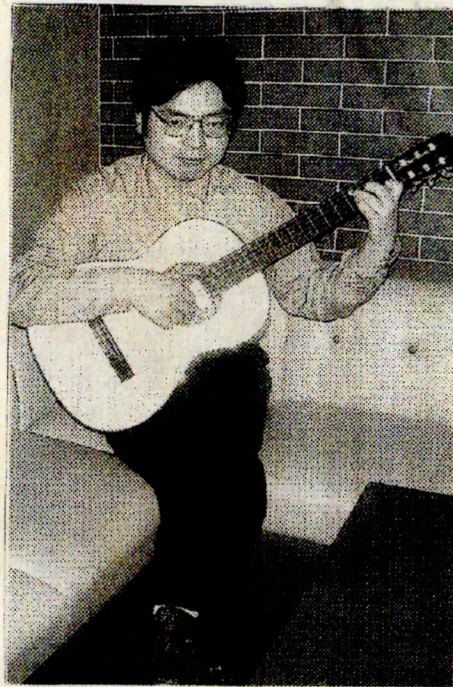
国際化の時代を迎え、初等教育の現場では「公用語」としての英語の重要性がますます高まっている。すでに一部の小学校では英会話学習が導入され、全国的に2002年春から小学3年

以上を対象に始まる「総合的な学習の時間」では、英会話を選択する学校も増える見通しだ。しかし、教科としての導入には依然として慎重論も根強い。これに対し、金沢市の小学校で非常勤講師を務める英語塾経営、清水恭宏さん(32)「同市藤江南」は「真の国際人を育てるには英語を国際社会で生き抜く手段と位置づけ、カリキュラムを導入すべき」と唱えている。

【田中 義宏】

小学校での現状の英語教育で課題や問題と思うことは、

清水さん 今の英語教育は国際理解の一環という位置付けです。これは一つに



英語教育改革を唱える塾経営者

清水恭宏さん(32)

しみず・やすひろ 金沢市出身。立命館大在学中、英国に留学。福祉に興味があり卒業後、再び英国に渡り、知的障害者の施設で半ばボランティアとして1年間働いた。この経験で語学力を身に付け、帰国後、英語塾講師を3年間勤めた。3年前、29歳で英会話塾「エスティーム」を開業。現在、金沢市の英語活動指導協力員として同市立千坂小、同中央小で毎月1回、同中央小芳斎分校で1学期に1回指導している。

英語教育の面で日本は韓国に20年遅れているそうです。

清水さん 日本では小学校の先生にはまだ教える十分なスキル(技術)がない。そこでもっと日本人英語教

師の雇用枠を増やし、熱心で優秀な人を採用した上で、小学校から中学校へ継続したカリキュラムを行うべきでしょう。このままでは、小学校で中途半端ながら、ある程度に学んだ子供が中学で改めてABCから学ぶという非効率な状態になり、授業を聞かなくなったり、中学の早い段階から英語嫌いの生徒が増える恐

「こんな人」

13歳から始めたクラシックギターの腕前はなかなかで「中学卒業後、最初は普通高校ではなく、ギターの

専門学校に通うつもりでした」とか。クラシックからポップス、ボサノバなど幅広いジャンルをこなす。趣味が高じて、時折50万円の愛用ギターを片手に金沢市片町の行き付けの酒場へ。常連客の顔ぶれに合わせ、マライヤ・キャリー、ダイ

の反動で、文法用語を極力避けるよう指導しています。が、その結果、フィリピン英語に偏り、基本的な文法を知らない生徒が増えては、小学校で中途半端ながら、ある程度に学んだ子供が中学で改めてABCから学ぶという非効率な状態になり、授業を聞かなくなったり、中学の早い段階から英語嫌いの生徒が増える恐

日本人は日常的に英語に触れる民族とは違います。欧米人の赤ちゃんみたいに英語を勉強できるはずはなく、文法は手段としての技を養うには欠かせないもの

です。

清水さん 英会話産業というのはいくつかありますが、英語が米・英国人のように話せない日本人のコンプレックスの上に成り立っています。

人数は限られています。英語教育の防波堤になり、1人でも多く、国際舞台でも活躍できる人材を育てたいです。

例えば隣の韓国では英語を「手段」として割り切った教育を進めている。小学校の教師に年間1000何時間という英語の研修をさせ

小学校に教科で導入を